吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第13号，175－183，2008

英語所有構文の例外に関する考察（２）

平見　勇雄

A Study on the exceptions of the usages of the English Possessive Genitives (2)

Isao HIRAMI

Abstract

In the previous papers, we have seen the examples of the exceptions of usages of the English Possessive Genitives, which can't be explained within the framework of cognitive linguistics, and there seem to be some more factors related to the usages of exceptions.

The aim of this paper is to see other factors which enables such usages to happen.

Key words：English Possessive Genitives　Exceptions　Function
キーワード：所有構文　例外　機能

はじめに

英語の所有構文（以下 A 's B, B of A の形式とする）の考察に関して、認知言語学的な考え方に沿った分析から言うと、それぞれの形を使って表されている表現は、形式が備えている特徴に合ったＡとＢの意味関係やＡの特徴などから決まり、それらの条件が両形式に分かれる主な要因であるとの立場から用例の説明を行ってきた。この考え方は、実際の英語の用例を観察した結果、出てきたものであり、その点で言語分析をする上で有効であるように思われる。

しかしある状況のもとでは、この考え方から推測されるＡとＢの関係がその形式で表すことが許されず、逆の形式を使わざるを得ない事態が起こる。その例外の一部を前回、平見（2007）で見て検討し、その要因を見た。

今回も意味と形式の対応の観点から見ると例外になってしまう場合の検討を行う。その結果、形式と意味の対応関係が重要である英語においてさえ、他の要因が例外を生み出す大きな影響を持っているのではないかということを見ていきたい。そしてその要因が影響を持つのは英語における形式と意味の対応関係の約束事が（当然のことながら）それ自体目的になっているのではなく、言語が別の表現手段やコミュニケーション上の円滑さを求めていること、今回取り上げる、例外を生み出す要因となっていると思われる「意味と形式の約束事を踏まえながらも、一方でその約束事を破ることで、新しい表現効果を生む」という方向に働くことが優先されるからであ

吉備国際大学社会福祉学部子ども福祉学科
〒716－8508　岡山県高梁市伊賀町8
Department of Child Welfare, School of Sicial Welfare, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi-city, Okayama, Japan (716-8508)

ろうということを見ていくことにする。

１　今回取り上げる問題

本来、たとえばＡ's Ｂ で表されてよいはずの表現が別の形式で表されることは、実は論文などの公式な文書では頻繁に見られる。たとえば次のような例である。

My father's house is much bigger than Tom's father's.

The house of my father is much bigger than that of Tom's father.

ＡとＢの関係が所有関係となっている下の文のような表現が生まれることを認知言語学の枠組みを守りながら納得できる説明をどのようにすればよいだろうか（ただし、両者とも可能な表現ではあるが、下の文の方が上の表現より形式的で、硬い印象を与えるようである。また普通の会話では上の文が好まれ、文章の場合は下の文が好まれる)。そしてこれまでの認知的な観点からの所有構文の説明からすると上の例が正しいことから、下の方がある種、逸脱した表現ととらえることが出来る。

こういった違いは文体的に異なるニュアンスを出すために行われるということで結論づけることもできる。しかし今回はもっと別の観点からの、つまりその理由を、その理由と重なる部分はあるものの、言語の観点からではなく、広く我々人間が日常的に行っている効率性の観点から考察してみたい。

２　前回の主張

前回平見(2007)で取り上げた例の中に次のようなものがあった（池上1995)。

１）John taught Mary English.

２）John taught English to Mary.

３）I showed the man who sat next to me on the train a picture.

４）I showed a picture to the man who sat next to me on the train.

１)、２）の例に限らずこの形式で表される大半の例からわかることは、いわゆる英語の第三文型と第四文型において、主語、動詞、間接目的語、直接目的語に同じ語がきても、それぞれ別の形で表されると、もう一方の文型とは違ったニュアンス、意味がそれぞれに生じることである。あとで述べるように孤立語と分類される言語は語順が意味に大きな役割を果たす特徴を持つことから、その性格が「形式が変わると意味も変わる」という考え方につながっていくわけだが、これは逆に考えれば、それぞれの形式にはその形自体に、ある意味を伝えようとする特徴が内在している、それぞれの構文自体に特徴となる独自の意味合いが組み込まれていると言うことができる。

しかし、ある内容を伝えたいときに、第三文型ではなく第四文型が内容を伝える形式として適当であるとしても、間接目的語にあたる語が３）の例のようにあまりに長くなると､文としては形が悪くなり、コミュニケーション上その内容を伝えにくい形となってしまう。そういった状況では、第三文型が第四文型の代用として使われることが起こる。

また意味と形式の対応という点からすれば相反する関係となってしまうのに、こういった代用を可能ならしめている理由として、英語の重要な特徴の一つである end-weight という言語傾向がここで関与しているとも考えられる。It～to や It～that の構文と呼ばれる形式や、たとえば次の例のように内容を伝える節が最後に置かれる英語の持つ性格がここにも見られる点で共通しているからである。

The word spread that they were giving money away.

したがって英語が持っている言語特徴（一つの傾向)とコミュニケーションにおける伝達の容易さ(す

なわち理解しやすさ）が、例外と言える例を生み出す手助けとなっていて、それが意味と形式の対応関係を壊していると考えられるのである。

この点を考慮すると、意味と形式の間に見られる一定の対応関係は、かなり密接な関係を作り上げていると考えられる英語においてさえ絶対的なものではなく、言語全体に浸透している他の特徴やコミュニケーション上の言葉の理解しやすさの方がある場合には意味と形式の関係よりも重要なものとして働いていると推測できるのである。

平見（2007）ではこういった end-weight の例について見てきたわけであるが、これ以外の要因、理由でも、A 's B, B of A の形式間で交代が起こっているものがある。

たとえば my brothers ' friend という表現が会話で使われる場合、アポストロフィーが単数についたものか複数についたものかがわかりづらい。そのあいまい性を避けるためにこの場合 B of A の形を使う方がコミュニケーション上、正確に内容が伝わる。つまり発音という点も形式の代用に影響しているのである。

言語が果たさなければならない第一の目的は正確な内容伝達にある。意味と形式の対応関係が特定の意味内容の伝達に有効であるとしても、先ほど述べたように両者の対応関係が守られることそれ自体が目的になっているわけではない。スムーズで効率のよい意味伝達が何よりも優先されるはずである。このような、言語の背後にある当然の要求が形式と意味の結びつきを時に崩し、言語本来の目的を果たそうとするために守られるべき約束事の優先順位が下がり、両者の関係を阻害することになる要因を受け入れざるを得なくなるのである。そしてその要因は以下で見るように my brothers 'friend の例や end-weight に限られることなく、それ以外の複数の要因に根ざしている可能性があるかも知れないのである。

3　言語以外における役割の重複

英語が意味と形式の間にかなり密接な対応関係を持つ性質の言語である一方、その関係を阻害してしまう要因が、なぜ複数あるのか。その理由の一つは人間をはじめとする生物は、ある条件のもとで限られた有限個のものしか選択肢がない場合、その限られたものを出来る限り効率的に利用する方向に働く性質があらゆることの基本となっているからではないかと思われる。たとえば目の見えない人が目では得られない情報を手に入れるために耳や手など他の器官が普通の人以上に働き、少しでもそれを補うという意味での効率性とつながっていることかも知れない。広い意味で代用という言葉に当たる内容である。それについて日常的な人間の営みの中での例を取り上げて考えてみたい。

上で挙げた例だけを見ても言語の成立には複数の約束事が入り混じって存在していることがわかった。つまり意味と形式が結合することにより、あるニュアンスを表す意味内容が決定されるという約束事、コミュニケーション上の理解のしやすさを達成しようとする約束事、発音による誤解の回避などである。しかしこれらの約束事をすべて達成することは大半の場合不可能である。たとえばコミュニケーション上の理解のしやすさを達成しようとする方向に動くと、２の３）～４）の例で見たように、本来の意味と形式の関係がくずれてしまうという相反する事態が起きてしまうからである（どの要因が優先し、どの要因がプライオリティを失うかということは言語に限らず、その時その時で違い、さまざまなあり方で起こる）。

しかしこれは言語に限ったことではなく、その他のことにしろ、そこには複数の要因が絡んでいるのが普通である。たとえば日常の生活においても一つのものに複数の意義や内容を重ね合わせている例が多く見られる。そしてその複数の機能、目的はそれが置かれた状況によって影響され、それによりどれ

がメインの機能を果たすのか優先順位も異なってくる。しかしその複数の機能や目的がある背後に必ずそれ特有の効率性が常に働いている。まずは生物の効率性を考えてみたい。

生物は多種多様であり、それぞれがそれぞれの存在のあり方を模索して生き延びてきている。同様に、言語も多種多様で、それぞれのあり方で効率化をかなえているように思われる。両者の類似性、平行性という点から英語の効率性を見てみると何か新しい視点が見つかるのではないかと考え、以下のような点に注意しながら論じてみたい。つまり①　言語はそれぞれ固有の効率性のあり方があるということ②　そして英語には一つの形式にいくつもの規則が絡みあって存在するということ、である。つまり言語には多様な効率性が見られるし、それは言語それぞれの特徴に沿った形で発展しているということである。

生物の多様性を考えてみると、動物には栄養分を摂取するための口があり、栄養分を吸収すると、当然吐き出し排泄する機能がある。動物ならば口からものを取り込む。しかし植物の場合、動物とは生きていく上での生存のあり方がそもそも根本的に異なっている。自分から動いて獲物、食料を手に入れるという体の作りをしているわけではないので、その特徴にあったような栄養分を取り込む（すなわち生きていく）すべを発達させなければならなかったはずである。大まかに言えば、その字のごとく植物と動物の一番大きな違いは植物が動くことができないことであろう。したがって植物は何よりもまず自分の生存が可能なところを自らの居場所として確保する必要がある。そしてその場を確保するために根を張る。

ところで植物の根に関して考えてみると、根は二つの意味を持っている。一つは動かないでいるように自らの生存を支える土台である。もう一つはその根は生きていく栄養分を吸収する役割をも持ち合わせるよう発達していることである。大半の植物は自らの居場所を確保し、自身を支えている根から水分を吸収し、土からの栄養分を確保し、取り入れた水分のうち必要のないものは葉っぱを通して蒸発させる。つまり動物でいう排泄にあたることをしている。

したがって根の存在には複数の意味が生じている。動物にしろ植物にしろ生物はそれぞれのあり方に合う方法で外部から必要な栄養分を体の中に取り込み、余分なものを吐き出している。その点では動物と植物は共通しているが、そのあり方は大きく違う。そして動物同士の間であっても決して一様ではない。

たとえば我々が「口」と呼んでいるものも、それぞれ動物間で果たす役割は決して同じではない。犬と人間は同じ哺乳類であるが、口が果たしている役割は同じとは言えない。口のつくりが違うという意味ではなく、その役割が違っている。そうならしめている大きな理由として人間は二本足で歩き、犬は四本足で歩くが、そのこと自体が口の果たす役割の違いに影響しているからである。たとえば何かを持ち運ぶ時、人間には手があるが、人間の手にあたる犬の前足は歩いたり走ったり立つために主に使われる。したがって犬が何かを運ぶ時には人間の手にあたる機能を持たないため、口を使うことになる（ただし前足は穴を掘ったりする時に使われるので後ろ足と同じというわけでもない。ゆえに人間の手と共通点がないわけではない）。人間も怪我をして手がつかえないときは、場合によっては口を使わざるを得ないことがあるので、同様の使い方をすることがある。しかしそれは決して人間の口の本来の役割となっているわけではない。一方、犬にとっては食物なり、自ら手に入れたものや、あるいは生まれたばかりの子犬を運ぶ場合、口が人間の手の役割を常に果たすため、人間の口の役割だと思われない用途までもがごく普通の役割となっていると言えるのである。

つまり、ある器官がどういった役割を担うかは全体の特徴から決まる。他の動物に対応するものがあるからといって両者で同じではない。重なる部分はあっても両方の動物で対応する役割は異なっていると見るべきであろう。役割はそれぞれの動物の体全体の機能などとの関連が強くその影響を持つと言えるからである。

これと同様、複数の言語上の対応を考えてみると、ある言語の言葉や構文が別の言語の言葉、構文に一見対応しているように思えても、別の言語である以上、それらが果たしている役割には当然違いがある。これは英語と日本語の対応する単語の意味一つを見てみても、語の持つ意味の広がり（あるいは重なり）が違っていることからも容易に理解できよう。

ところで複数の機能、目的と効率性に今一度立ち戻って考えてみたいが、同じ言語内において本来持つ役割以外の、別の役割を果たすということが実は言語では起こっている。効率性が重要な地位にあり、一つの約束事や目的に縛られる以上の重要性を持つ場合、時には想定していないような役割をある文や節などの要素が兼ねることも起こる。

したがって、一見関連のないように思われるかも知れない日常見られる事と変わらない効率性が言葉にも反映されているのではないか、そしてそういった観点から言語のいくつかの現象をとらえることができるのではないかと考えられるのである。

そこで、限られた個数の言葉の羅列と構文に効率的な利用が英語で実際に起こっている例を次に見てみたい。

４　対象物が複数の意味あいを担うこととの共通性

その前にもう少しだけ、一つのものが複数の役割を持つ例を紹介したい。以上で述べたように、多くの場合、それぞれの状況の中で最大限それぞれの役割を果たすよう工夫が凝らされている。身近にある別の例で言えば、コインロッカーで公共に備えられているものの中には、100円玉を入れると戻ってくるような仕掛けとなっているものがある。しかしこれは100円というお金の価値にその意味を負わせているわけではない。もしお金の価値が唯一の意味というのなら50円玉二つであろうと10円玉十個であっても同じように使えるはずである。しかし100円玉しか使えないのは、同じ100円という価値を持っていても100円玉のコインだけが持つ特性を利用しているからである。つまりお金本来の価値とは別の側面の価値に着目することによって成り立っている。

このように、一つだけの側面からものを見るのではなく、ある対象を多面的にとらえ、それを利用することは日常的に見られることである。実際我々は気付かないうちにそういったことをやっている。ある一人の人間がどのような状況下でも、たった一つの役割しか意味しない、あるいは誰から見ても同じ役割しか担っていないならわかりやすいように思われるかもしれない。しかし人間の暮らしがそんな約束事に縛られ、成り立っているとしたら非常に不便であり、多くの捉え方を阻害していることになってしまう。おそらくは、日常的に触れる機会が多ければ多いものほどそうなっていないのではないだろうか。たとえば社会の中で、ある女性は子供から見ると母親と呼ばれ、生徒から見ると教師と呼ばれる人もいる。配偶者から見るとその女性は妻と認識され、また甥や姪から見るとおばさんに当たる、というように、ある対象物と自身との関係が明らかになるような表現に満ちている。故に、この例のように指示物によっては一つの言葉しか持たないことは不便である。こういった特徴が言葉と指示物の間に築かれたのは人間が生活の中で自分たちのコミュニケーションにこのような捉え方が必要であり、経験上有意味だからこそであり、それが慣習化された結果である。すなわち言葉には常に人間の経験や人間自身の都合との関連が強く関係していることがわかる。人間が言葉を使うとき、その言葉をいかに効果的に

使って相手に自分の意図を伝えるかは日常的に意識的、無意識を問わず行われていることなのである。したがって言語の構造それ自体にも何らかの形でその言語の特徴にあった形で人間が行っている効率性が発達したり、その一部が反映されることは当然起こっていると思われる。結論を先に言えば、いくつかの役割が一つの形の成立過程に組み込まれている可能性は極めて高いと考えられるのである。

ただ、ある一つの対象物に複数の機能や目的があるとしても、その対象の機能、目的が常にすべて果たされるかどうかは先ほども述べたように決まっているわけではないし、実際には不可能である。その対象が受けもつ役割のどれがクローズアップされるかは言語にしろ、日常的なものにしろ状況が大きく左右する。たとえば服という題材を考えてみる。人間はどんな人種であろうと何らかの衣装を身にまとうが、服の果たす役割は一つではない。体温を保温する役割もあれば、外部との接触による怪我から身を守る役割も持つ。あるいは他人に見せたくない部分を覆い隠す役割もある。

これ以外に、服は人が生きていくために必要最小限と思われる以外の役割も担っている。ある時には自分をよりよく見せたいというファッションにつながる役割も果たすし、ある時には患者と医者、看護師等、社会的な地位や立場をはっきりさせる意味合いを服に持たせることもある。サッカーのような敵と味方が入り混じってゲームをする競技の場合は、それぞれのチームのメンバーを区別するために、選手にとっても観客にとっても服は必要最低限の役割と同様、重要な意味合いを持つ。つまりファッションショーや試合での服が持つ意味合いは通常の服が果たす基本的役割と同等かそれ以上の価値を帯びる。

一方で、以上で述べた服の基本と思われる役割がそうではない（少なくとも日本に住んでいる我々にはそう思われるような）場合もある。保温や怪我から身を守る役割は洋服の基本的な、そしてもっとも重要なものと思いがちである。しかし、たとえば熱帯地方に住むインディアンのように保温という点からは服が不要なところもある。そういった服装は、いわゆる先進国において服が果たしている基本的役割という点から見ると異なっており、語弊を恐れずに言えば服という概念自体が違ってくるものもある。つまり最低限の機能や役割さえも、置かれている状況や環境で変わり、絶対的なものではないということである。

別の例を挙げると、たとえば食物、食べるということに関して何が基本であるかと問われれば、人間が自分の生命を維持するためであろう。しかし現代では食べる行為は生命を維持することだけにその意味を見い出して行われているとは言えないだろう。もし生命を維持するというだけであれば、味を追及するという現在のレベルにまで人間は努力の方向を向けなかったかも知れない。味覚の本来の意義の一つであったであろう、かつては食べてもよいものと食べてはいけないもの（すなわち、体に取り入れてよいものかどうか）を判断するという、生命の危険を察知するのに必要な選別の目的を助ける役割を持っていたかも知れないが、先進国における現在の日常生活ではたいていの場合、そういった心配をする必要はほとんどなくなった（もちろん腐ったものであるかどうかを見分けるという役割は今でも有効であろうが）。そういった環境が整った状況においては、味覚はそれまでとは違う意味合いを持つようになる。たとえば我が国のように食に満ち足りていて、飢えが問題にならない現状では、特別の場合を除き生命を維持していくという以外の目的が以前よりも大きな重要性を帯びるよう変化してきている。味わうということが生命を維持することと同様、大きな食の意味になってくると、相手をもてなす接待という行為に結びついたり、あるときは人の心を癒す効果を持ったり感動を与えたりと、精神的な面に

おいての作用を果たす役割まで負わせられるようになってくるからである。

身のまわりのさまざまなものを題材にそのあり方を考えてみると、人間はある一つのものにさまざまな角度から複数の意義や意味を持たせ、本来のあり方と思われるもの以外の意味を重ねあわせていくということを日常茶飯事に行っているのである。つまりこういった広がりが言語の効率化にも表れ、言語の用法にも影響していると考えられるのである。

これは実は今回問題としている所有構文にもあると考えられるのであるが、その前に別のあり方の例と考えられるものを取り上げてみたい。

英語の関係代名詞は主格と目的格でその省略の用法が違っている。主格の関係代名詞は省略できないが、目的格の場合は省略できる。

He is a doctor who knows my aunt.（主格）

He is a doctor (whom) I know very well.（目的格）

なぜ主格の関係代名詞が省略できないかといえば、構文が確立しているその型に当てはまらなくなり、省略されると文の構造の把握が困難になってしまうからである。一方、目的格の場合はなくても、構文が確立しているが故に、どの節がどこを修飾しているかが理解できるので、文の構造を把握するのに問題が起こらない。省略してもしなくてもいいという両方が残った場合、残った場合と省略された場合に意味の違いを生じたり、意味の違いまでは生じなくても文体上の差を生じたりすることは言語において普通に起こる。しかしなぜ省略が起こるかと言えば、なくても理解できる場合は無駄な部分をそぎ落とすという、いわゆる効率のよい方向に言語が動くという性格が反映されているからであろう。

こういった効率性の特徴があるが故に、たとえば主格の関係代名詞であっても以下のように、本来は許されない省略が許されると考えられる。

She is just the type I always knew would attract him.

Most of those qualities we think are typical of Americans in general were the result of this frontier life.（江川：1991）

関係代名詞がなくとも I always knew やwe think という要素が文の構造を明らかにする役割を果たし、故に主格の関係代名詞の代わりをしてくれるからである。当然のことであるが、これらの挿入文が関係代名詞の代わりをするものだと英語を母語とする話者にもともと認識されているわけではない。英語の持つ言語構造において、たまたま前後の語の環境から関係代名詞の主格の機能を兼ねられる状況にあり、英語の構文の把握を可能にしていることから、どんな場合も効率性の原理が働くため省略されるのである。この場合、普通では考えもつかない、まったく違う要素が関係代名詞の代用となっているのである。

これまで、以上いくつかの例で見てきたように、複数の意味合いをさまざまなものが人間の意図により持ち始めるように、本来あるものが果たす役割が特別な状況に置かれては、本来の役割とは離れたものとしてたまたま機能するということ、これは日常的に我々人間がいろいろなものに見い出す性質を持っていることから言語にもそれに類する性質が反映するということが起こっているのである。

5　言語間による違い

ただし断っておきたいのは、何度も述べたように、ある特徴を備えた言語がそういった例を作り上げる場合、その言語が持っている特徴に沿って（その構造を生かしながら）効率性を発揮するということである。したがって以上のように関係代名詞の主格に対する代用が起こったとしても、関係代名詞のない日本語には同様の代用が起こるはずはなく、あるのは別種の代用なり、効率性ということになる。英語とは性格の違う日本語はこういった代用になるような言語構造をしていないからである。

言語は多種多様である。数え方にもよるが世界中には大体六千ぐらいの言語があると言われる。ある分類方法によればこういった言語は親戚関係にあり十くらいの家族に分けられるようである。また別の方法で分けると三つに分類される（米原：2007. 102－103）。これは単語をどのように一つの文章にまとめるか、という点でである。孤立語、膠着語、屈折語という三つの分類になるが、英語はこの中で孤立語に属し、動詞が活用せずに文章の中の単語の役割が語順によって決まる性格を持っている。一方、日本語は膠着語である。膠着語というのは一つの言葉に他の品詞が付け足されてくっつくからこう呼ばれているのであるが、そのため単語の文中における役割は「て・に・を・は」で決まる。この二つの言語のタイプはそもそも成り立ちがそれぞれ違うのであるから、見かけられる効率性が異なっていることは当然である。

生物の形態にたとえれば、生き物は水中か陸上で生活している。水中と陸上の二つにまたがっているものもあるし、水中だけの生き物も、陸上だけの生き物もいるだろう。陸上も主に空を飛ぶ鳥と地上、あるいは地中で生活するものに分かれる。また成虫になるまでの期間ですべての段階を経るものもある。いずれにおいてもそれぞれの環境に適応する形で生物は生きている。したがって、地中にいるさまざまな生物はその地中の環境との兼ね合いから、可能性のある限られた選択の中で生存の道をたどったはずである。当然のことながら、空を飛ぶ生き物にあり得るであろう選択の可能性とは物理的にもその取るべき道は違うであろう。膠着語と屈折語はそれぞれの構造が違っているのだから、陸上に住む生物と海中に住む生物が進化していく、あるいは環境に対応していくあり方と同様、それぞれ異なっていると考えるのが普通である。

この点で日本語と英語の効率性のあり方を同系列で論じることは適当ではない。つまり英語には英語特有の効率性があり、日本語には日本語特有の効率性があるからである。これはほとんどすべての言語間で違っているはずである。

さて話を所有構文に戻してその効率性を考えてみたい。４では関係代名詞の主格の代わりをある環境では文が果たしている例を挙げたが、それは全く予想もしない別の要因が代用となるタイプの効率性であった。

しかし所有構文の形式の場合は、これとは違った効率性と言える。すなわち、これまで見てきたように、一つのものが複数の役割を持つ、あるいは担うという効率性の例と考えられるのである。第三文型が、ある条件のもとでは第四文型の代用となる場合と似た効率性である。ただし異なっているのは、もう一つの形を取った方が文の把握が容易になるといった理由で、その用法を許しているのではない。英語は形式と意味が密接な関係を築き上げているために、対応関係になっていない形を取ると、自然と違ったニュアンスが想起されるという性格を持っているが故に、別の形を使うと、本来の表現形式を使う場合とでは、異なった表現効果を生み出すという理由による代用となるのである。

もちろんこの立場を取ると、たとえばA 's B で表現出来ているものすべてが B of A では表現できるわけではないため、ある意味ではそれらの例との区別をどう説明するのか、という新たな疑問を生み出すことになる。

しかし例外として、説明が難しいいくつかの例においては、英語全体の背後にある「一つのものにさまざまな役割を持たせる効率性が語や構文に深く、そして広く浸透している」という効率性の存在抜きには考えられないのではないだろうか。少なくとも例外となる用法を可能にしている手助けとなっている、と言えるのではないか。つまりある場合には相補的関係にある形式で表現することを阻止する役割を果たしていると同様に、意味と形式の一定の関係

を逆手に取って、新しい表現効果を生み出すという創造の余地を与える全く逆の役割も果たしているのではないかと思われるのである。

背後にあるそのような性格が、本来の用法には反している、しかし状況によっては新しい表現を可能たらしめる要因として働いていると思われるのである。

結論

能動態を受動態にするのは、いくつかの理由が働いて起こる。主語がわからない、主語を述べたくない、あるいは目的語に当たるものに焦点を当てたい、など決して一つではない。それと同様にＡ's Ｂ をＢ of Ａ にする場合も、その理由はいくつかあった。ＡとＢの意味関係から、Ａの特徴から、Ａの語の長さから、あるいは口語体として表現したいかどうかなどである。このことからそれぞれの構文はそれぞれの性格から独自の理由によって相補関係にある構文同士のふるまいを確立しているのである。

しかし言語は同時にいつもそれ自体が少しずつではあるが絶えず変化している。その変化の背後には当然人間のコミュニケーション上の都合が反映されているし、効率性も大きく関わっている。それは言葉の経済性にもつながっている。

英語を含むどんな言語においても限られた表現形式しか存在しないのだから、さまざまな理由で一方の形式からもう一方の形式が表現として選ばれることは当然あり得る。Ａ's Ｂ から Ｂ of Ａ を使うことになるのもたった一つの理由によるものではない。しかしやたらに本来使われるはずの表現からもう一つの表現が使われることになれば意味と形式の関係はなくなってしまうことになる。したがってそこにはそれ相応の理由はどうしても必要である。本来使われるはずの形ではなく、新しい表現効果を生み出したいがために、もう一方も形式を使いたいというのも、限られた表現形式を有効に活用する手段の一つであろう。

したがって英語において例外と呼ばれているものの中には、以上で述べたような効率性が起こっている可能性が強いと考えられるのである。

参考文献

池上嘉彦　1995．『英文法を考える』　筑摩書房
江川泰一郎1991　英文法解説　金子書房
日本植物生理学会編2007．これでナットク！植物の謎　講談社
米原万理　2007．米原万理の「愛の法則」　集英社新書
平見勇雄　2007．「英語所有構文の例外に関する考察（１）」、『吉備国際大学　社会福祉学部研究紀要』12，145－156．